花喰

伽藍

僕がその道を通ったのは、本当に偶然だった。

しとしとと、雨が降っている。
春の雨だ。とても冷たい。今年はなかなか春らしい気候にはならなくて、夜になれば完全に冬に逆戻りしたかのようになる日が続いていた。こういうのを、花冷えと呼ぶのだろうか。
一歩間違うと、息が白く凍り付きそうだった。
もう、四月だというのに。
僕の住む地域は毎年、二月に雪が降って最後、となっていたのだけれど、今年は四月に入ってからもちらと雪が舞ったのだ。
綻びかけた桜の上に、薄らと白の紗が掛かっていた。
夕方、冷え始める頃に振り出した雪は、夜の更ける頃には完全に上がっていた。それどころか雲一つ無く晴れ渡っていて、冗談のように明るい上弦が、ぽっかりと浮いていたのだ。
まさか、一日の内に雪月花を全て味わえるなんて事があるとは思わなかった。
どこかの誰かは、惜しい、満月ならば、なんて。言うのかも知れないけれど。僕は、満月よりも上弦の方が好きだ。
満ちて仕舞えば、あとはただ、衰え、痩せ細るだけ。
だったら、中途の月を見ている方がまだしも救われるような気がするのだ。
だから、今日。昨日、小望月を複雑な心地で見上げていた僕が、地面を濡らしている雨滴を見て何と無く浮かれて仕舞ったのも、仕方無いと思う。
寒いのは、どうにもこうにも苦手だったけれど。
「……寒っ……！」
言っても仕方無い事は百も承知の上で、僕は我満出来ずに口に出した。昼ならばまだ辛うじて春と言えない事もないのに。
僕の町には、桜が多い。毛虫が増えると、お母さんは嫌がっていたっけ。
当然のように、通学路にもある桜を、ぼんやりと見上げる。花は、まだ五分咲きだったので、少しだけほっとした。
この分なら、少しくらい強い雨が降っても、あっさり散って仕舞うような事はないだろう。あっという間に散って仕舞う、儚い印象の桜だとて、なかなかどうして、強かに生きているのだ。
僕がそれに気付いたのは、生まれてから随分と経った後だったけれど。
傘から滴った雫が、僕の制服の肩を濡らしていく。せめて教科書なんかが濡れないように気を付けながら、僕は帰り道を急いでいた。
歩く道は、外灯が照らしてくれる。
柔い光。
そんなものよりも余程柔っちく思える月の光は、実はそれさえあれば何の光源も要らないくらい明るいのは知っていた。
夜というのは案外明るくて、恐怖を感じるには少し足りないかな、なんて。

　そんな事を思って笑った僕を、責めたのだろうか。いきなり強い風が吹いて、油断していた僕はあっさりと傘を持って行かれて仕舞った。
「あっ！」
　ころころと不器用に転がって行く傘を、慌てて追い駆ける。車が来ていなくて良かった、と頭の片隅で思った。
　足の遅い僕が漸く追い付いた時、傘は、小さな路地まで転がり込もうとしている所だった。
「ーーーー」
　ほっと一息吐いて、顔を上げて、驚く。その小路は、小奇麗に整備された町の中で、ぽっかりと取り残されたように、草の生える地面を晒していた。
「こんな所が……」
　あったなんて。
　思って、僕は、嬉しいような悲しいような、複雑な気分になった。
　置いて行かれて、居心地悪そうに開いている道が、なんだかとても僕に似ているような気がしたので。
　そんなの、ただの勘違いの感傷だという事は、知っていたけれど。
　道の両側はやっぱり小奇麗な家に挟まれていて、小路をより一層、周囲から浮かせているかのようだった。
「……」
　時刻は、夜の十時。寄り道は、しようと思えば出来なくもない時間だ。
　女の子じゃないのだから、親だって、そこまで過剰に心配する事もないだろう。
「……」
　僕は、迷った。
　自分の中で結論が出てからも、やっぱり暫く躊躇って、結局。
　僕は、その小路へと、足を踏み入れた。

ざぁ、と風が鳴った。
それを感覚として捉えてから、木々の声なんて、聞いたのはいつぶりだろうかと。
周囲は暗かった。当然だ、近くには外灯がない。
曇った夜空には月もない。傘を追い掛けている内にもう随分と濡れて仕舞った僕は既に諦めて仕舞っていて、傘は畳まれたままだ。
月があれば、もっと明るかっただろう。
光も要らないくらい。
満月を惜しいだなんて、思うのは珍しい。
けれど、その月が無くても、尚、人間の眼というのは案外、周囲のものを捉えられて仕舞うのだ。
今、この時の、僕みたいに。

彼女の印象は、朝、だった。
出会ったのが、この、夜の暗がりの中だというのが、とんでもなく場違いに思えた。
昼の、強過ぎる光の中も似合わない。
これは、僕の勝手なイメージだったけれど。

少女。

そして、視線の先に桜。
桜はやっぱり五分咲きだった。少女の周りの木は桜ではなくて、どこでも見掛けるような常緑樹だ。
真白のワンピースが、酷く肌寒いように思われた。
横顔は、美しい。僕に語彙が少ないのが残念に思えるくらい。そう、在り来たりな表現で許されるならば、多分、精巧な人形のような。
あまりに非現実的だった所為だろうか。
少女を散々観察した挙句、彼女が傘を持っていない事に気付いたのは、その更に後だった。
「あの……っ」
気付くまでは遅かったが、気付いてからは早かった。もっと言えば、何も考えていなかった、というのが正解なのだろう、多分。
少女が振り向く。こちらに視線を寄越す。眼が合った事よりも、何よりも驚いたのは、ただ単純に、彼女が動いたという、その事実にだ。
だって、ねぇ。
思わないじゃないか、
普通。
ただ、そこに在る為だけに作られた、
人形のような。

「――こんばんは」
　それにも関わらず、少女は僕の考えなど素知らぬげに――否、事実知る訳が無いのだ――、ふわりと微笑んだ。
　これもやっぱり在り来たりな表現で、恥ずかしい限りなのだが。
　花が綻んだような、笑みだった。
　多分、丁度、そう、そこにある桜が綻ぶように。
　夜の挨拶を寄越されて、僕は少しだけ、混乱した。けれどすぐに立て直して、挨拶を返す。
「こんばんは」
「はい。――お散歩ですか？」
　少女から掛けられる、あまりにも軽やかな声音が、僕が勝手に抱いたイメージと違い過ぎて、一々処理に時間が掛かる。
「う、うん、そう。散歩、みたいな」
　あぁ。僕は一人で勝手に落ち込む破目になった。もっとあるだろう、色々、と。
　敬語を使わなかったのは、眼の前の少女が、僕と同世代の人間に思われたからだ。少なくとも、年上、ではないように感じる。
「良い夜ですね」
　あまりにも穏やかに言われて、僕は少しだけ息を吐く。これが彼女の常態だと思えば、落ち着く事が出来た。
「月が出ていれば、そう言う人はもっといただろうけど」
　何せ、満月を好む人間というのは随分と多いようだったので。
　言うと、彼女は微笑んだ。僕の返答がお気に召したらしい。――と、ここまで来て、僕は漸く、当初声を掛けた目的を思い出した。
「雨」
「はい？」
　僕と彼女の距離は、遠い。もっと近付こうかと思って、――少しだけ、躊躇った。多分その躊躇いは、先程、あの小路に入るのを迷ったのと同じ類のものだ。
「寒くない？　風邪、引くよ」
　迷って、迷って、迷って、躊躇った挙句、僕は近付く事にした。彼女と桜との距離は、僕と彼女との距離より更に遠い。
　少女の髪は、長い。何にせよ暗いので判り難いが、――恐らく染めてはいないのだろうと、僕は判断した。何よりも、彼女が染めるというのが思い付かなかった。
　腰に届きそうな射干玉。
　朝の光の下で会いたかったと、僕は少しだけ、残念になった。
　距離が近付き、相手が更によく見えるようになる。白皙の貌は、やっぱり美しかった。
「これ、使って――」
　言い掛けて、僕は息を飲んだ。相手には、不自然に思われなかっただろうか。
　さらりと長い、彼女の髪。
　さらりと――その違和感に、僕ははっきりと気付いたのだ。

　月は、無い。
　しとど、しとど、と降る雨は、いまだに僕の体を濡らし続けているというのに。
　彼女は、一切、濡れてはいなかった。
「……？　何でしょう？」
　尻すぼみになった台詞が、聞き取れなかったのだろう。少女は、ゆったりと、首を傾げて見せた。
　彼女は、一度も、その場から足を動かしてはいない。
「ーーーーーーこの傘、使って。僕、男だし。風邪とか、あんまり引かないから」
　嘘だった。季節の変わり目にはしょっちゅう風邪を引くし、今だって、正直、悪寒を覚え始めている。
　それでも、僕は、そう言って彼女の手の中に自分の傘を押し付けた。擦り抜けたらどうしよう、とーー正直、思わなくはなかったのだけれど。
　彼女の手は、温かかった。
　雨なぞ知らぬげに。
　寒さ、など。
　僕は、にっこりと微笑んだ。
　背は、少しだけ僕の方が高い。その事に、僕は安堵した。
　少女は、途惑っているようだった。当然だろうと、僕は思う。けれど結局彼女は、僕を見上げて微笑を返してくれた。
「有り難う、御座いますーー」
「うん」
　彼女の瞳は、あまりにも透徹としたものだった。僕が恐ろしく思わなかったのは、その眼を見たからだろうか。
　陽の下で見たかった。僕はもう一度、そう思った。
　だから、こう問うた。
「いつも、ここにいるの？」
「えぇ。ーー多分、きっと。ですけれど」
「そっか」
　深くは突っ込まず、僕は軽い調子で頷いて見せた。
　ついと、桜を見遣る。その桜は、随分と大きかった。もしかしたらこの辺りでは一番古いのかも知れない。
　距離は、随分と遠い。彼女は、ずっと、ここからあの桜を眺めていたのだろうか。
「大きいね」
「え？」
「桜」
「あぁーーはい、そうですね。この町では一番、大きいのですのよ」
　やっぱりなぁと、僕は思った。何故だか知らないけれど、彼女が言う事は単なる事実、のよう

な気がした。
「また――」
　思っていた、だけなのに。
　気付いたら、僕は、口に出していた。
「桜が満開になった頃に、ここに来るよ。その時は、あの桜の下で見よう」
「――――」
　相手は、返事をしなかった。
　だから見下ろした少女の、ただゆったりと返された笑みの悲しさだけが、今も。
　脳裏に焼き付いて離れない。

　多分、今でも。

「おぉ、今年も咲いたなぁ」
「うん？」
　友人に声を掛けられて、僕は振り返った。
　相手は、僕よりも背が高い。それが、少しだけ気に食わなかったのだけれど。
　この二年間で、仲良くなった男だった。二年前は、顔も知らなかった男だ。
　あの、春の日には。
　僕はあの後、案の定、熱を出して寝込んだ。それは、新しい環境に馴染めなかった事へのストレスも、原因ではあったのかも知れないけれど。
　桜の満開の日に、あの、置き去りにされた小路を歩いた。
　そこには誰も、いなかったけれど。

　あの微笑が、今でも。

　あの日持っていた傘は、僕の手元に無い。
「――？　おい、聞いてるか？」
「え？　あぁ、ごめん、何だっけ」
「お前なぁ……」
　豪放磊落、という言葉が似合う友人が、呆れたように溜め息を吐く。僕は誤魔化すように、小さく笑って見せた。
　最初の印象は良くなかった。自分には合わないと感じたからかも知れない。
　多分、成長したのだろう。
　自分も。
　この友人も。
　それは、大人から見れば微笑ましくなるような、小さな小さな変化ではあるのだろうけれども。
「咲いた、って――」
「桜」
　ひら、と薄紅が舞った。
「良いねぇ、春！　出会いの季節だ！」
「旅に出たくなるな」
「そうそう、旅に――って、おいおい。帰って来いよぉ？」
　眉を上げた友人に、僕は肩を竦めた。
　帰って来いと言われたら、自信が無いと言うしかない。
　僕は今でも、夢に見ている。
　あの日の桜。

どこかの丘。
少女の後ろに見た、常緑樹の森も。
それは、小路一つ向こうに挟んだ、小さな異世界であったけれど。
満開に咲いた花は、あとは、散るだけ。
実も付けずに。
散って、朽ちて、腐り果てて。
どんなに待っても、二度とは咲かない。

いつか、どこかで。
花喰という、言葉を知った。
はなくらい、と読むらしい。
桜を愛する、その鬼は。
愛するが故に、自分が花を枯らせて仕舞わないように。
遠くから、決して触れずに、焦がれるように、薄紅の散る様を眺めるのだという。